聖公会生野センター機関誌

울림（ウルリム）（響）

第13号

1999年11月20日発行

題字：康秀峰

共にいる空間

植松　誠

大阪教区の教区事務所が、まだ鶴橋の大阪城南キリスト教会にあったころ、鶴橋界隈は私のウォーキングエリアで、よくキムチを買ったり、会議のあとみんなで焼き肉を食べに行きました。ふだんの生活では体験できない空間がそこにあり、その雑踏や匂い、チマチョゴリや布団の純色など、胸がワクワクしたことを思い出します。大阪の街に、このようなところがあるというのが最初不思議でしたが、そのうちに、この空間が持つ魅力にとてもひかれるようになりました。

北海道に来て、その懐かしい感覚を思い出させてくれたところがあります。それは、苫小牧港に停泊している外国船の厨房でした。マレーやバングラデシュの船員たちの食事を作っている厨房は、カレー粉や胡椒、羊の肉の強烈な匂いがたちこめていて、一瞬頭がクラクラとするほどでした。

苫小牧には、ミッションズ・ツウ・シーメンの施設があります。苫小牧キリスト教船員奉仕会というのが正式な名称ですが、世界中でミッションズ・ツウ・シーメンとかフライング・エンジェルという愛称で親しまれています。現在、世界の海で働く船員たちの大部分は、いわゆる「後進国」の人々です。人員削減・すすむ過当競争の中で、船会社は低賃金で使える「後進国」の船員を雇い、またスピード化とコスト削減のために、港に入っても、翌日には出港ということで、これらの船員たちにほとんど休みが与えられません。またたとえ寄港地で休息するにしても、安い給料では日本のようなところでは何も買えません。世界的な不況の中で船会社としては、いくらでも安い労働力を補充することができるので、これら船員の立場は極めて弱いものです。

毎日夕方、シーメンズクラブは大型のバス(写真)で、船員たちを各船に迎えに行きます。クラブに着くと、船員たちは家族に国際電話をかけたり、ピンポン、ビリヤードを楽しんだり、軽食やビールで歓談したり、また、神父や牧師にミサやお祈りを頼んだりします。だれもが、このクラブでつかの間の休息を楽しんでいるのが彼らの顔から分かります。また、上陸できない船員のためには、クラブのボランティアが訪船し、彼らの話し相手になったりもします。

苫小牧のシーメンズクラブは、11年前に発足した当初から、市内のいくつかの教会が協力しています。また、市民のボランティアの協力もこのクラブの大きな力となっています。それぞれは、時間を持て余しているのでもなく、英語が達者なわけでもありません。それでも、ただ海外からの船員のそばにいることが大切なのだということを知っている人たちです。決して無理がなく、でしゃばらず、力みもなく、ただいつも船員たちとともにいること、その空間に、私は不思議な魅力と心地よさを感じるのです。

（うえまつ・まこと　北海道教区主教、元聖公会生野センター運営委員長）

時のしるし

強制された韓国永住
「金嬉老事件」の本質

松山　献

「金嬉老(キム・ヒロ)事件」の金氏が、逮捕から31年半ぶりに仮出獄、韓国に永住することとなった。ある年代以上の人は、この事件をその光景と共にはっきりと記憶にとどめていることだろう。また、ある年代以下になると、この事件を全く知らないという人が多くなる。私はちょうどその中間で、事件のことを知っているが記憶はほとんどないという者である。

1968年2月、静岡県で暴力団員を2人射殺、寸又峡温泉に13人の人質をとって立てこもり、その間に民族差別の体験を切々と訴え続けたという事件だ。75年に最高裁で無期懲役が確定、服役を続けていた金氏が、韓国の僧侶を身元引受人として、この9月7日仮釈放されたのである。

しかし、この事実は全国紙でも当日と翌日に少し報道された程度で、あまりにもあっさりとした取り上げ方であった。全国紙を見る限り、社説やコラムのテーマに取りあげられることもなく、通り過ぎてしまった感がある。法務当局の思惑通り、マスコミも問題の核心を避けようとしたのだろうか。

金氏自身の「私たちのだれにも人を殺す権利はない」という言葉通り、殺人という行為は何人にも許される行為ではない。しかし、金氏をしてそこまでに至らしめた背景には、日本社会の矛盾と差別体質がある。「金嬉老事件」の本質はそこにあるし、金氏が日本人に対して突きつけた問題もそこにあった。

金氏が、刑務所から直接空港経由で、つまり日本の土を一歩も自由に踏むことなく、日本社会と一切遮断したままで、韓国へ飛んだのは、この事件の本質を知っている法務当局が、それを国民に見抜かれないために選んだ方策と思われる。

一言で言えば、「在日」という視点をすっ飛ばしてしまったということであろう。この事件に象徴されるように、日本社会全体が「在日」をとばして、「日韓のいい関係」をうたいつつある。「在日」は、日韓関係と切り離して考えるわけにはいかないが、日韓関係そのものではない。一方、韓国でも「在日」の視点は欠落している。かつて日本聖公会宣教セミナーで韓国からの参加者のお話を聞いたが、そこには「在日」の視点がないと何度も感じされられた。

「住めば都という言葉があるが、日本の都合で日本人になったり、韓国人になったりさせられ、今また日本の都合で韓国に行こうとしている。私にとって(韓国は)異国と同じで、複雑な心境だ」という金氏の言葉は、偽らざる本心だろうと思う。彼は、日本に帰らないことが条件であったために、再入国申請を書くわけにいかず、韓国永住を強制された形になっている。生まれ育った、肉親もいる日本にはもう戻れないのである。

金氏は殺人という罪の償いをしなければならない。しかし、金氏が日本社会に対して突きつけた問題、すなわち「在日」に対する私たちの罪を、果たして私たちは償おうとしているだろうか。確かに、31年前の事件当時と今日とでは、一部の人々の努力によって制度も人心も変わりつつある。しかし、金氏をこのような形で韓国に行かせてしまうしかなかったこと、そのことに誰も違和感すら感じなかったということは、私たちが未だにその罪自体に気づいていないことを示している。いろいろな意味で、これからますます「在日」が見えなくなっていく状況にある。そのような状況に抗って、「在日」に固執しつつ、日韓関係の改善と日本社会の変革を考えるべきだと思う。

（まつやま・けん　京都聖ステパノ教会信徒）

生きる原点

林　真知子

作業所に導かれて１年が経ちました。

この１年間をなんと表現したらよいのでしょう！一言ではいい表せないですね。なぜなら、この仕事は私が今、「生きているんだ」ということを証しするのに絶好のものだからです。どの１日をとってみても中身が詰まっていて、とても大切なんですよ。

ここまで感じられるのは、きっとこの作業所という場に、何か人が生きていく上で必要なもの、「原点」のようなものがあるからだと思いますね。つまり、私が私らしく私のままで居られるところ、それが今働いている（精神障害者の憩いの場）作業所なんです。

では、なぜこの作業所で働くことになったのかということを話したいと思います。私は、幼い頃から人との出会いが多く、たくさんの「心」とこれまでも接してこれたようです。「出会い」というのは本当に貴重なもので、時には悲しい別れもありますが、それでもそれを含めて１つの「出会い」なんだと感じます。

私の場合、この「出会い」を繰り返す度に、人に対する「思い」が強められていっているように思います。その中に１つに、友人の不登校がありました。複雑な家庭で育ったため心が傷だらけになっちゃったんですね。その時は、共に考えたりして私の力で何とかしようと思いました。真剣に考えました。と同時に何かドラマのようにことが片づくと思っていた部分も実際にはありました。けれど結局その子の「心の傷」は、ただの優しい言葉がけくらいでは直るわけではなかったんです。ただ、その子自身をそのまま認めることが大事だったんですね。そのように出会いの中で何度となく自分の無力さを知らされることも多かったです。心というのは、とてもとても繊細で弱いものだと気がついていきました。だけど私は、その度、人の「魅力」も強く感じました。なぜなら人はその弱さを知った上でようやく大切なもの、「生きる原点」を見つけ出して行く気がしたからです。

東成工房のメンバー

だからこそ、作業所は私にとって、大切なものを見つける場所だったんです。ここでは、いろんな事情を抱えている人たちが認めあって生きています。小さな社会だけど貴重なものがあります。それは自分の「弱さ」を受け入れた上で前進しようとする姿が見えるからだと思います。そして、それこそ私が、求めてきたものだったのです。

しかし現代社会では反対に、自分の「弱さ」に気が付かず、自分自身を受け入れられない人が多いと感じます。自分を受け入れない人は、やはり人を受け入れることはできません。そしてその結果、責任を他の者に向けてしまうのです。悲しいことですよね。

だから私たち職員としては、本当に受け入れられるべき人たちが受け入れられていく社会を願って毎日働いています。

最後に、私の望みとして伝えたいのは、みなさんにも作業所というところをぜひ知っていただき、そして共に感じてもらいたいということです。　（はやし・まちこ

精神障害者小規模作業所東成工房職員）

「血と骨」と私
—身体性の喪失と文学—

梁 石 日

「血と骨」の舞台、猪飼野（イカイノ）

今年、前から会いたいと思っていたマルセ太郎さんの演劇をやっと見に行くことができました。帰路の途中、マルセ太郎さんと話をいろいろしました。するとなんとマルセさんの実家は私の育った猪飼野の火葬場のそばから200メートルも離れていない。そしてマルセさんが友人の名前を挙げていくと、これまたなんと私と同じ友人なんですね。びっくりしました。また、金泰生さんという作家が住んでいたのと同じ長屋に私もすんでいた事を知りびっくりしたこともあります。生野に住んでる在日は、そういうしがらみからは抜けられないんじゃないかと思います。

大阪には済州島出身者が非常に多いのです。私の「血と骨」という小説も済州島出身者のドラマです。もちろん私の両親も済州島出身です。済州島出身者が大阪に多いのは、1923年に済州島と大阪を結ぶ航路が尼ヶ崎汽船によってできました。当時、大阪は工業地帯で、多くの労働力が必要だったんです。その労働は低賃金で雇い、搾取そのものでした。済州島は大変貧しく、みんな日本に出稼ぎに行くのです。尼ヶ崎汽船の君ヶ代丸が就航したとたん急激に増えました。君ヶ代丸は2年ほどで座礁し、第2君ヶ代丸が就航します。この第2君ヶ代丸が、日露戦争の軍艦を改造した船で、小さな船でしたが、船の先が軍艦の異様な形をしていました。在日の1世のほどんどの人たちはこの船で来たのです。済州島の高いところにたって君ヶ代丸をみると、あの船にのって大阪にいってみたいという気持ちに駆られたそうです。日本・大阪へ行って稼ぎたいという気持ちは、今も東南アジアの人たちと同じでしょう。しかし、船賃は高く日本で働いている在日の給料の3～4ヶ月分。費用を作るのは難しく、日本に来ている兄弟・親戚に仕送りをしてもらって、日本に来るでのです。ですから、在日の間で頼母子（たのもし）講が非常にはやりました。まず頼母子講に入って、頼母子を落としてもらってそのお金で日本に来て、働きながら返していく。そして済州島から多くの人が大阪に向かい、ある村では全員が大阪に来たというところもありました。済州島に戻る人は、豊かな人で、ますます大阪へ行きたくなるのです。このようにして、大阪に済州島人が多くなっていたんです。

しかし君ヶ代丸の船賃は高すぎるため、東亜通航組合という団体を作りカンパを募り、船を借り受けて半額くらいの船賃で運行しました。みんな組合の船に乗るようになります。すると尼ヶ崎汽船も値下げして、客の奪い合いになりました。そのころ労働争議も起こるようになっていきます。弾圧も厳しくなります。この闘いでは、阪神工業地帯の組合とも連携し、大きな影響を与えました。この争議は意味のあることでした。そして、在日の運動史にも大きな影響を与えています。

「血と骨」の神話性

「血と骨」は、いろんなところで紹介され、ベストセラーになりました。問題は、この小説はいったい何なのかということなんです。読者がどう読むは全くの自由です。しかし、作者はある意図に基づいて書いています。ぼくが、問題意識をもって考えてきたことは、金石範さんが「血と骨」の神話性ということで、非常に適切に指摘してくれています。

「金俊平が信じ、たよれるのはただ暴力を孕んだ肉体だけであり、その存在は民族的抵抗とか労働争議とかのイデオロギーから切れている。その切れた分が巨大な凶器と化した肉体の暴力になって、帝国権力ではなく周辺へ、もっともいたいけな家族たちへ向う。帝国主義所産の暴力がかもす肉体の爆発が本来なら日本帝国へ向けて然るべきなのに、運命の悪意がそれをねじ曲げる。帝国への無意識が復讐が家族へそして、帝国の身代わりに。

このイデオロギーは被植民地性である。金俊平が意識していなくともそれは被支配の流民として蒙古斑のように刻印されているのだ。」

その答えというのは私自身まだわからない。つまり一冊の小説がはらんでいる問題意識というのは、作者の意図している問題意識からはみ出していくということがあると思うんですね。この「血と骨」はその典型でしょう。

「血と骨」の成立過程

こういう小説は格闘して書こうとしても書けないんです。最初は、「よし書いてやる」と書こうとしたんですが、全然書けないんです、それで5年ぐらいししてまた書こうとしたんですが、また書けないんです。書いているプロセスで金俊平という主人公がどんどん大きくなってきてしまう。そして、書けなくなってしまう。

その間に何冊か本を出しました。実はその中で親父の話がちょこちょこ出てくるんですよ。最初の『狂躁曲』の運河にも、それから『族譜の果て』にも『子宮の中の子守歌』にも出てきます。これは、一種のレッスンをしている感じです。サンサーラという雑誌に親父の話を連載してほしいという話が来たんですね。実はぼくはすぐ吹聴する癖があるんですね。酔っぱらった勢いでおもしろおかしく吹聴してしまうんですね。『夜を駆けて』のときもそうなんですよ。『血と骨』もそうです。あちこちで親父の話をしていて、その勢いで書いたら、すうっと書けたんです。書かざるを得ない状況に追い込まれたんですね。

意識の崩壊と身体の崩壊

主人公が持っている肉体的な存在。金俊平の持っている肉体、存在は、日本の高度経済成長と無縁ではないでしょう。ひとつの時代性と一致しているのです。

高度経済成長とは豊かさの追求です。人間誰でも豊かになりたいものです。ぼくの若いころは本当に貧乏でした。昔の家、今でも残っているんです。訪ねていってびっくりしました。こんなところに住んでいたのかと。そういう時代から見れば、今の日本は本当に豊かになりました。在日同胞もそれなりに豊かになりました。しかし、この豊かになるということは、大量生産、大量消費の徹底ですね。そのためにもサラリーマンは企業戦士となって家にも帰らない。

私の友人は、月曜日に東京に出てきたら、金曜日までカプセルホテルに泊りです。家に帰らずに、何のための家でしょうか。

徹底した消費経済の豊かさで失ったものそれは、私たちの身体性ですね。つまり大量生産、大量消費のなかで、とりもなおさず、私たちの身体を徹底的に消費し尽くしたのです。本当にそれこそ奪われ、あるいは自分で捨てていったかもしれない。そして、いわゆるバブルが崩壊していくんです。

そしておきたのは、意識の崩壊です。意識は私たちの日常の中で常に崩壊しているんです。「新ガイドライン」にしろ「日の丸・君が代」にしろ「盗聴法」にしろ、これらに対して全然抵抗できない、全然抵抗しようとしない。日常的に常に崩壊しているものですから、抵抗力をなくしているんですね。これは、バブルの時には音を立てて崩壊していたんです。巨大な崩壊現象でした。そして意識の崩壊現象は同時に身体の崩壊を起こし、相乗作用していきますから、これをうめることはできないのです。

文学における身体性の喪失

身体の空洞化の問題は単に経済的な側面にとどまるものではなく、日本社会の全体問題としてかなりの分野にまたがっています。文学においても、例外ではありません。文学においておきたのは、文学の細分化です。日本だけの現象です。「推理小説」「冒険小説」「ホラー小説」…いっぱいあります。紹介されるときもそうです。「推理作家の誰々」「冒険作家の誰々」きりがありません。つまり文学が持っている本質的なものは、どこかに行ってしまっているんです。「文学とは何か」という問いそのものが成立しなくなっているのです。

文学の世界での細分化もますます進んでいますが、しかしこのままでは先細りです。「推理小説」や「冒険小説」など、同じようなものをいくつも書き続ける事はできません。そして、書き続けることによって、言葉の力を失ってしまいます。言葉が本来持っていた力が細分化によって失われてしまったんです。

このような身体性を失った文学の世界において金俊平のようなの存在が、「血と骨」が多くの人々に読まれた理由の一つではないでしょうか。

（やん・そぎる　作家）

1999年9月12日大阪城南キリスト教会にて　文責:編集部

済州大学校

文 京 洙

済州大学の秋　まだ、10月の末だというのに、ソウルあたりは急の寒波で朝夕は零下まで冷え込んでいるとのこと。ここ済州も、寒い、とまではいかないが、標高が500mをこえる済州大学の周辺では木の葉が色づき始め、日中には秋の冴えた日差しが大学周辺の豊かな自然にふりそそぐ。私の宿舎は、この大学の広大な敷地の西はずれにあり、昨日の夜は、久しぶりにオンドル用のボイラーに火を入れなければならなかった。ここでの生活も桜のころから数えて７ヶ月、慌ただしかった春や夏のことを思うと、近ごろは時間の流れがおだやかで、済州の大地にのびのびと広がる済州大学のたたずまいがいつになく身近で柔和なものに感じられる。

その済州大学は、済州市とはいっても、市街地から4.5キロほど離れたハンラ山のふもとに広がる国立大学で、九つの単科大学（学部）を擁し、学生数は１万人余り。周囲は開発制限区域で飲食店やコンビニなどはほとんどない。大邱の慶北大、釜山の釜山大、光州の全南大などが韓国の地方国立大学の名門として知られているが、済州大学は、そういう大学にくらべると歴史もあさく、蔵書資料なども貧弱で学生数もそれほど多いとはいえない。しかし、その広さと大学をつつむ自然は、韓国はもとより日本でもめったに見られないほどに、豊かで伸びやかである。

済州大学校のキャンパス

学生たち　ところで、私は、この済州大学でこの９月から講義をしている。政治外交学科の３回生、40人ほどが相手で科目は「日本政治論」。最初の週に学科レベルの「開講パーティ」とやらがあり、私も誘われた。学生たちは「日本から来た在日の教員」をあたたかく迎えてくれて、その和やかなひとときが、私にはことのほかありがたかった。授業は、張り合いがあり、とりあえず雰囲気もいい（と少なくと私自身は感じている）。

男子学生には兵役からの復学生など年嵩の者も多く、講義中の意見や質問もなかなかシビアである。たとえば、近代の日朝関係をめぐっては、「李朝」とか「閔妃」という言い方をしてはいけない、という。前者は「朝鮮時代」であり、後者は「明成皇后（ミヨンソン・ファンフ）」だそうである。前者についてはともかく、後者については、最近は同じタイトルのミュージカルがアメリカなどでヒットしていて、この妃の歴史的な位置づけやイメージそのものに、私と学生たちとでは大きな隔たりがあることが解った。授業のなかで最も問題となったのは、「甲午農民戦争」の性格づけである。それが当時の封建体制を「根本的には否定するものではなかった」との私の講義に、学生たちはまぎれもなく「反封建闘争」だったと切り返してきた。いまにして思えば、どちらも正しい、といえるのだけれども、授業では私も退けず、学生たちとのちょっとした論争となった。

授業は、済州島育ちの学生たちと、日本育ちの私が、互いに身につけた文化の違いを確かめ合う場でもある。その「確かめ合い」が重苦しくギスギスしたものにならないのも、言ってみれば、この大学をつつむおおらかな自然の恵みなのかもしれない。

（むん・きょんす　立命館大学教授）

遺伝子組み換え食品は食べたくない！

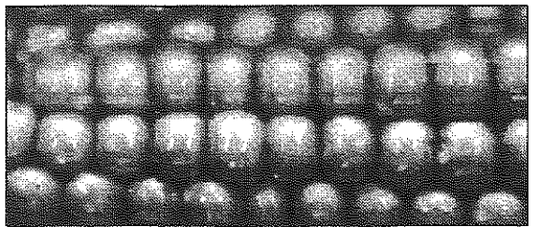
近澤　淑子

私たちの食卓に毎日上ってくる食品は、日本国内や世界中から寄せ集められています。技術の進歩により、より速くものが手に入るようになりました。これまでも残留農薬、保存料、添加物などの安全性が問われてきました。今また「遺伝子組み換え食品」の安全性が問われています。成長期のこどもたちにこれらのものを食べさせていいのでしょうか。私たち大人も長期間食べ続けていいのでしょうか。

今年８月、農水省は2001年４月から遺伝子組み換え食品の表示を義務付けることを決めました。表示義務があるのは約30品目。主な指定食品は大豆、とうもろこし、じゃがいもなどの遺伝子組み換え作物や、それを原料とする豆腐、納豆、味噌、きな粉など。組み換え作物を使った場合は「遺伝子組み換え」、混入の可能性のある場合は「不分別」と表示が義務付けられています。それらの食品を選択するのはあくまで消費者である私たちです。混入割合が５％以下のものは表示対象外となります。そうなると、もはや選択する術はありません。

例えば大豆を見てみると、国内自給率３％、輸入の大部分をアメリカに頼っています。現地の輸送･保管過程で遺伝子組み換えのものも、そうでないものも区別しないので、混ざっています。今までも私たちが知らない間に食べていた可能性もあります。

最近、安全性に対する消費者の不安の広がりから2001年に先がけ、食品業界が表示について取り組み始めています。また、非組み換え原料との分別流通の動きを始めている食品業界もあります。



見ただけではわからない

この10月から名古屋学生青年センターでは、「食」を考えるシリーズとして、遺伝子組み換え食品についての３回連続講座が始まり、第１回目が先日開催されました。その中で、イギリスの自然科学雑誌「ネイチャー」に、殺虫遺伝子を持ったとうもろこしの花粉が他の植物に飛散･付着し、その花粉を食べたオオカバマダラという蝶の幼虫が死亡したり、生育障害を起こしたという論文が発表されて、大きな議論を巻き起こしたことや、1989年アメリカで、日本の企業が遺伝子組み換えバクテリアで作ったアミノ酸を健康食品として売り出したところ、37名が死亡し、1500名以上が不治の病になるということが起こったということを知り、私はその安全性についての不信感がますます大きくなりました。また遺伝子組み換え作物が環境、生態系にも影響を及ぼすことを学び、組み換え食品は食べたくないと思います。

先日、「英国ウェールズ最大の教会である長老派教会同盟が政府に対し、遺伝子組み換えを応用した食品および動物用の食物すべてに対し、一時的にその使用を中止するように訴えた」という記事がキリスト新聞に掲載されました。一方、最近、遺伝子組み換えに否定的な姿勢を示していたバチカン（ローマ教皇庁）の『生命擁護アカデミー』が「自然の秩序を乱さない範囲であれば、世界の飢餓や疾病対策としての役割を否定的にとらえるべきではない」という肯定的な見解を発表しました。この異なる見解を私たちはクリスチャンとしてどのように理解すればいいのでしょうか。生命に対する畏敬の念はどこへ行ったのでしょうか。私たちを含めた生きとし生けるもの＝生命について、ひとりひとりが大切に考えて欲しいと思うのです。

（ちかざわ･よしこ 名古屋学生青年センター職員）

精神障害者地域生活支援センター「すいすい」から

呉 光 現

【すいすいの始まり】

ウルリムに毎回、精神障害者に関わる記事が掲載されいているのは皆さんご存じかと思います。1994年に始まった「精神障害者の生活の場作りを進める会」の活動に当センターは当初から事務局を担い、深い関わりをしてきました。

4年間のこの活動を通して、精神障害者を取り巻く環境が私たちの周辺ではずいぶん変わってきたと思います。私自身も地域の中で精神障害を持つ、多くの人々と知人・友人になり、時にはわずかばかりの「支援」もしてきました。それら一連の活動はすべて市民として、そして聖公会生野センターの与えられた役目であったと思います。

昨年より本格的に準備を始めた地域生活支援センター設立の動きはその延長線上にあるものと言えるでしょう。

今年4月から、大阪市より委託を受けて始まった「すいすい」は、生野・東成・天王寺の3区にある20の関係諸団体が集まり運営されています。構成団体の内訳は、小規模作業所（6つ）、精神科診療所（7つ）、家族会（3つ）、精神障害当事者団体（1つ）、市民団体（2つ）、そして聖公会生野センターです。このように「関係者と市民」が共に支援事業を始めるのは全国的にも余り例のないことではないでしょうか。

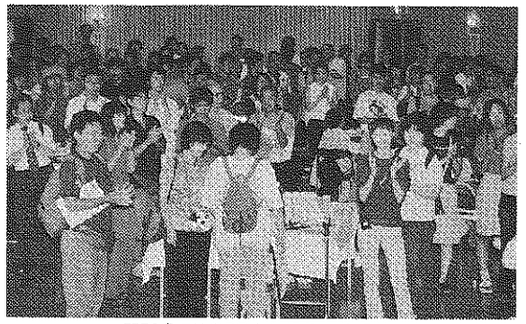
利用する当事者と子どもたちの交流

【精神障害者を取り巻く厳しい現実】

私たちが何故「地域生活支援事業」に乗りだしたのかを一言述べたいと思います。

日本では精神障害者に対しては「医療」中心の施策が長い間とられていきました。しかし医療と言ってもその実態は人里離れたところに造られた精神病院に入院すると言うことで、「隔離」政策と言うべきものだったと思います。そんな中で数年前におこった大阪の「大和川病院」事件や栃木県の「宇都宮病院」事件にみられるように「治療」どころか精神障害者を食い物にして私腹を肥やしている「病院」とは言えないところもあります。現在も約37万人が精神病院に入院しており、その内の4分の1から3分の1にあたる人々はいわゆる「社会的入院」と呼ばれ、入院しておく必要がない人たちです。しかし彼ら・彼女らは退院しても様々な理由で地域に受け皿がないために「入院生活」を強制されている実態です。

少し病院のことを述べましたが、ここ数年、精神障害者を地域で支える動きが起こりつつあります。まずなんと言っても増えてきた精神科地域診療所と小規模作業所の働きです。この2つが軸になりながら地域に暮らす精神障害者の行き場が少しずつ幅が広くなっています。しかしまだまだごく小さな「社会資源」でしかありません。そこで浮上してきたのが「精神障害者地域生活支援センター」です。これは作業所と違い精神障害当事者がくつろぐ場です。食事提供、入浴サービス、生活諸相談、更に当事者活動の支援も生活支援センターの役目の中にあります。一言で言うならば利用者である当事者が好きなときにそして主体的に利用するところにその味があるのではないでしょうか。もちろんセンターとして様々な支援プランを企画実行していきますが、あくまで利用者が主人公の施設であって欲しいものです。これまで大阪市には一つもなかったこの支援センターが単独施設として始まったのは大きな意義があります。と言うのも大阪だけではなく全国的にも精神病院がこのような「生活支援事業」をおこなっているところが多く利用者にとっては「病院の延長」の感が拭えない現実があるからです。



開所式には200人を超える参加者

【反対運動に対峙して】

私たちの希望を乗せて始まろうとしたすいすいですが5月末から地域住民の反対運動が起こり「苦労している」のが私の率直な思いです。

反対運動は建前では「事前説明がながった」としていましたが本音は「精神障害者は怖い。何をするかわからない」「この街に来るな」であったでしょう。このような社会資源の設置に関して起こる反対運動を最近では「施設コンフリクト」「人権摩擦」と言いますが、私たちもこの波に飲まれることになったのです。

反対の幟がすいすいの周辺に乱立する中にあって、障害者団体の協力を得ながら地域ビラ配りをし、7月には全国の聖公会の教会と関係諸団体に1万通に及ぶすいすいの現状とカンパのお願いを訴えるアピール文を発送しました。そして「すいすいの業務正常化を求める要望署名活動」も展開する中で、全国から多くの支援が寄せられ、短期間に1万名以上の署名が集まりました。そして何より私たちを勇気付けてくれたのは、反対の幟の中を多くの利用者がすいすいに通ってくれたことです。反対の幟がすいすいの周辺に乱立する中にあっても、それにへこたれることなく積極的に利用してくれました。それはここ数年地道な交流・学習等を積み重ねてきた結果だったのです。もちろん反対の幟があるために来れない人もいましたが、私たち運営する側、働く側にとって当事者の顔がいつもすいすいにあるのは何にも代え難い支えでした。

すいすい近辺に立てられた幟

【最後に】

地域生活支援センターだけですべてが解決するわけではもちろんありません。就労・医療・住まい等、まだまだ課題は山積みです。しかし反対住民と対峙してきたこの半年の経験から仲間の絆が強くなるという大きな経験もしてきました。そしてより充実した支援体制の構築に向けて準備も始まりました。

厳しい冬を乗り切ってこそ、希望輝く春がやって来ます。このことに私たちが主体的に関われることは大きな恵みではないでしょうか。まさに「地域と共に歩むことを願って」いる聖公会生野センターの働きとして…。

（お・くぁんひょん　聖公会生野センター主事、精神障害者地域生活支援センターすいすい運営委員長）

大阪考 ⑪

高二三

『イカイノ発コリアン歌留多』

金蒼生（キム チャンセン）著、新幹社刊、定価1600円+税

大阪在日朝鮮人の中では、きっと金蒼生さんは知られた人なのだろう。でも、どんな知られ方をしているのか、ちょっと気になる。というのも、彼女の処女作『私の猪飼野』(風媒社）以来、大ファンである私は、やっと金蒼生さんの本をつくることができ、彼女の良さをこの『イカイノ発コリアン歌留多』で集約したいと思ったからである。

金蒼生さんから電話がかかってくる。最初は低い声で「キム、チャンセンです」と始まり、１分間はほとんど抑揚のない会話が続く。しかしその後は、気づいてみると10分も20分も話し込み、大きな声で笑い、電話を切ったあと、自然と元気が出てくるのだ。

金蒼生さんと酒を飲む。最初の10分間はお通夜の日みたいな時間をすごす。イメージとしては黒い服を着ている感じ。しかし１盃が入ると黒い服は赤い服に変わり、出るわ出るわ、面白い話がとめどもなく出てくる。私は腹をよじって笑いころげる。にわか大阪弁を使って調子を上げようとすると、「ウチ、東京人のへたな大阪弁、ダイキライや」とグサリとくる。

カラオケへ行って歌いまくる姿もみたし、ディスコへ行って踊りまくる姿もみた。実に多芸だ。そしてうまいのである。きっと、ちょっとだけコネがあったり運が良けりゃ、歌手にはなれただろう。

この本のブックデザインに使われている猫の絵を見てほしい。金蒼生さんが描いたものである。古本屋の店番をしながら手持ちぶさたになった時に描いたのだろうか。一心不乱、わき目も振らずに描いたのだろうか。絵書きにもなれたかもしれない。奥付けに「挿画・金蒼生」と載せた。彼女の一つの夢は、自分の本にこの一文字を入れることでもあった。

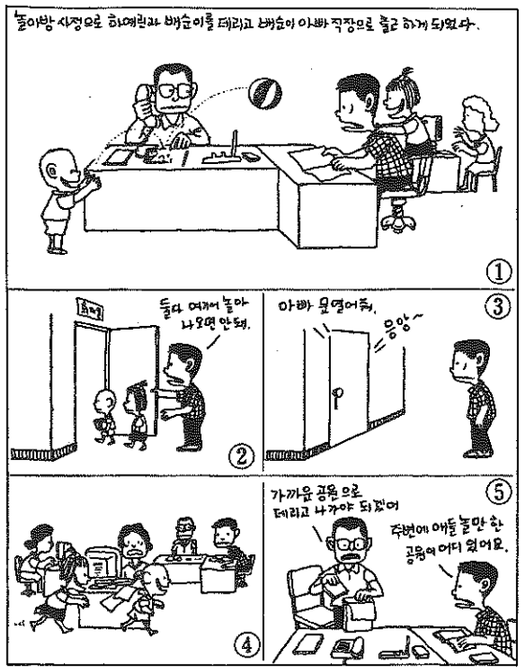
この本の中で、金蒼生さんは自分のことを「無敵の方向音痴」と言っている。はたしてそうなのだろうか。迷路のようなイカイノで生まれ育った人の中で、方向音痴が輩出されるのだろうか。信じがたいことである。何度か待ち合わせもしたが、一度としてまちがえたことはない。だが、彼女が言うように、人生におきかえてみて、最初の一歩を踏みちがえた時、永遠に終着点にたどりつけない。そういう人生を生きていかざるをえない私たちなのかもしれない。そんな時、磁石盤など役に立ちそうにないのだが、それでも、子どもが小学生のときに使っていた磁石盤を捨ててしまったことをくやしがる彼女なのである。

一年に数回、私は大阪に行く。そしてそのうち二回に一度は彼女に会う。本を作るという理由もあるが、彼女と会って解き放たれたいと願うからだ。だから『イカイノ発コリアン歌留多』には同世代の者たちの、人生の哀しさ苦しさを解き放つエキスがちりばめられている。金蒼生さんがいちばんよく似合う仕事は、歌手でも絵書きでもなく、人生相談のお姉さんなのかもしれない。

大阪で会議が終わり、飲みにおいでよ、と電話すると、「イヤや、あんたのまわり大学出た人ばっかりやろ」と必ず言う。それでもおそい時間、出かけてきてくれる姿を見ると、庶民派の、ふところの深い、情に厚い大阪の女を感じるのである。　　（こ・いーさむ　新幹社代表）

『イカイノ発コリアン歌留多』は聖公会生野センターでも取り扱っています。

世界で一番になる公園（세계에서 제일가는 공원）



① 遊び部屋（託児所）の事情でハエリンとペェ・スニを連れて、ペェ・スニのお父さんの職場に出勤するようになった。

② ２人ともここで遊んで、でてきたらダメだよ。

③ うわぁ～ん。お父ちゃん開けてよ～。

⑤ 近くの公園に連れていくとしよう。周辺に子どもが遊べる公園がどこにあるの？

⑥（のり巻き）

⑧（竜山・ヨンサン家族公園）子どもが遊ぶのにちょうどいいね。平日だから人がいないね

⑨ ソウルの都心に子ども公園があるなんていいね。ここは元々米軍のゴルフ場だったんだよ。

⑩ その後、米軍の部隊もなくなり公園にすれば世界で一番の都市になるだろうね。

作者：崔正鉉（ちぇ･じょんひょん）
パンチョギ（もう一方）の愛称で親しまれる。1960年韓国大邱生まれ。娘の誕生以降子育てをマンガで表現。ユニークな描写と男性優位の韓国社会で家事分担が評価。1995第1回平等夫婦賞受賞。

東京教区

日韓・在日プロジェクト

香山　洋人

東京教区の「日韓・在日プロジェクト」は、これまで社会委員会やＭＲＩ委員会が担当してきた在日の人権問題や戦後補償の問題などを担当する部門として発足しました。現在の主な活動は、横浜教区、北関東教区と共に「三教区生野委員会」を構成すること、そして、関東三教区と協力して、「聖公会生野センター」の働きを分かち合い支援することです。

「三教区生野委員会」は３月と９月に「日韓の歴史を学ぶ会」を開催し、３月には日韓の歴史、９月には在日を中心としたプログラムを行ないます。「日韓・在日プロジェクト」はこうした活動の他に、「聖公会生野センター」への募金活動、また、「ウルリム」の配布などを通じた情報の提供、ＮＣＣや「外登法問題と取り組む全国キリスト教連絡協議会(外キ協)」との協働などの他に、聖公会神学院の臨床牧会訓練における差別事件に関する学習なども継続して行なっています。

今後の課題として、「外キ協」などが推進している「外国人住民基本法」制定に向けた運動に力を入れるつもりですが、その中で「在日」の歴史性と日々の暮らしの中での差別の克服の課題に重点を置く活動を心がけたいと思っています。2000年度はこうした課題の他に、目的と期限の限られた「プロジェクト」という枠組みから、さらに間口の広い、常設的な機関への転換をはかるための準備を進める予定です。「聖公会生野センター」との協働が一部門の課題ではなく、教区全体の課題であることが明らかとなるような枠組み作りに励んでいきます。

(かやま・ひろと　東京教区日韓･在日プロジェクトリーダー、立教大学チャプレン)

余韻

◆聖公会生野センターが運営に参画している精神障害者地域生活支援センターすいすいへのご支援ありがとうございます。みなさまにお願いした業務正常化に向けた要望書は10734名の署名が集まりました。ご協力ありがとうございます。◆これまでも精神障害者の地域生活を支えるさまざまな活動を聖公会生野センターは行ってきました。生野の精神障害者作業所には、在日の当事者メンバーが多く、このことは差別による抑圧と無関係ではないでしょう。ひとりひとりが暮らしやすい地域づくりはさまざまな分野にまたがった取り組みが必要とされています。◆この秋、大韓聖公会「分かち合いの家」のスタッフ研修が大阪・名古屋でありました。今回は青少年問題に関わるスタッフの研修でした。関連する施設や活動を訪問しましたが、中･高生の世代に対する社会的資源は学校以外には少なく、日本においても大きな課題の一つだと感じました。◆この「分かち合いの家」の活動10周年資料集の日本語版が聖公会「日韓協働委員会」から出版されました。関心のある方は、聖公会生野センターまでお問い合わせください。(す)

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇後援会費
年額　1口 3,000円(個人)　　1口 10,000円(団体)
・郵便振込00960-0-133429「聖公会生野センター後援会」

◇自由献金・クリスマス献金
・郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
・銀行振込 三和銀行 東大阪支店
普通預金　3711311「聖公会生野センター」

発行所：**聖公会生野センター**
〒544-0003
大阪市生野区小路東1-17-28
TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357
E-mail:cyj02040@nifty.ne.jp
発行人：木　村　幸　夫
編集人：大　橋　　襄